羽村市立松林小学校　学校だより

松林

No.6

令和７年　６月　１０日

校長　　古瀬　義房

褒（ほ）めて伸ばす

校長　古瀬　義房

褒めるブームです。

突然、すみません。保護者・地域の皆様、日頃より松林小学校の教育活動に御理解・御協力を賜り、誠にありがとうございます。

さて、褒めるブームです。

いや、近年ブームを超えて、育児・教育、ビジネスに至るまで、各分野で「人は褒めて伸ばす！」の論調が強まり、定着し、昨今もはや「褒める文化」が社会に根付いてきているといってもよいような気もします。確かに、人間は認めてもらいたいと思う「承認欲求」をもっているといわれています。誰しも褒められたら嬉しいものですよね。

そもそも、「褒める」ことはなんのために行うのか。

「褒めて相手を思い通りに」なんて雑誌の特集が組まれていて背筋が寒くなったことがありますが、これは、褒めることによって相手に特定の価値観を与えて誘導出来るという考えだと言えるでしょう。しかし、この考え方というのは、危ういように思えませんか。例えば…

> 親が宿題を早く終わらせた子に対して「すごいね！早かったね！」と褒めたとします。
> その後、この子は、毎日のように、丁寧さや内容の正確さは気にせず、一目散に宿題を終わらせて見せにくるようになりました。

上記のように、子供に早くできたことを褒めたとすると、親の意図は別として「早いことは良いこと」、「ゆっくりやる人は褒めるに値しない」という褒める側の人の価値観を与えていると言えます。この例で言えば、時間をかけて丁寧に取り組んだり、身に付くまで繰り返し練習したり、興味をもったことを追求したりせずに、親に褒めてほしいがために「早く終わらせる」ことだけに集中するようになってしまっているのかもしれません。

これは、果たして「思いどおりに」なっているのか。

そもそも親は「子供を伸ばしたい」という純粋な気持ちで褒めたはず・・・。

どうやら「褒め方」に問題がありそうですよね。

実は、私もブームに乗っかって、何冊か本を読み込んでいました。その中でも、実際子供を相手にする仕事に就いている身として、一番納得でき、参考にしているものを今回紹介したいと思います。

紹介するのは、オックスフォード児童発達学博士である島村華子氏の著作『自分でできる子に育つ褒め方叱り方』（ディスカバー・トゥエンティワン社）です。本書には、以下のように「褒め方」についての解説がありました。

安易な「褒めて伸ばす」には要注意！

と著者は言っています。前述の宿題の例はこれに当たるでしょうか。具体的には、

×「すごいね！」「上手！」などの言葉のみを使った、具体性に欠ける表面的な褒め方

上記を「おざなり褒め」「人中心褒め」として、「褒められるためだけに行動する」「褒められないと不安になる」「失敗を恐れるようになる」など弊害のある褒め方としています。

いやいや、上記の言葉は親も教師もよく使うフレーズですよね。しかし、著者は、これらの声かけだけでは子供は、「外部からの承認でしか自分の価値を見いだせなくなる。」と言っています。

褒めるときのポイントとは？

う～ん…。「すごいね」とおざなりな褒め方もダメ、人中心に、「賢いね」と能力を褒めたりするのも効果的でないとするといったいどのような褒め方をしたらよいのでしょうか。

筆者は、「プロセス褒め」という、成果よりもプロセス（努力・姿勢・やり方）をより「具体的に褒める」ことが大切であると言っています。

では具体例を使って、良い褒め方と悪い褒め方を紹介します。

友達に親切にできたとき	発表会などがうまくいったとき	テストの点数が良かったとき
×　優しい子だね 〇　友達が元気になるように笑わせてあげたんだね	×　すごくよかったよ！ 〇　（具体的に）のところがダイナミックで引き込まれたよ	×　やっぱり頭いいね！ 〇　毎日のがんばりの積み重ねだね

このような褒め方によって、子供は、より自分の長所に目が行くようになり、さらに具体的なフィードバックをもらうことにより、モチベーションが自然と上がるということです。

なるほど！能力や性格をたたえるのではなく、取り組んでいる家庭での努力や挑戦した姿勢、やり方を工夫した点などを励ましてあげるのですね。

昨今の学校教育でも、評価について、より具体性を求められています。本校の通知表「あゆみ」の作成も、担任にとって重要な仕事の一つです。子供の伸びが具体的な事実をもとに記述され、次への学びの意欲を喚起するよう努めています。

個人的な感想としては、「プロセス褒め」をするためには、より子供のことを見ておくことが必要なのだなと感じました。子供には、自信をもって、ゆたかな人生を歩んで欲しい。親も教師も共通の願いですね。

さて、著者は「叱り方」のポイントも紹介しています。上手に叱るというのは、上手に褒めることより難しいものですよね。こちらについては、また次の機会に考えていきたいと思います。